

例4 「一九三七年、日本軍は、北京の郊外で中国の軍隊と戦いをはじめ……」

(あかるい社会 昭和三十年 周郷博ほか八名 中教出版)

わずか十五年の間に、日本の歴史教科書記述は右のように四回も変わっています。ところが、右の四つの蘆溝橋事件の説明はいずれも間違いである、という大変な証人と資料が出てきたのです。証人は元中共軍将校の葛西純一氏、資料は中共軍政治部発行の初級革命教科書で、

「……胡服こと劉少奇同志は、アジトの一つである北京大学で抗日救国学生を組織して指導し、ついには一九三七年七月七日、暗闇の蘆溝橋で、中日両軍に発砲し、宋哲元の第二十九軍と日本駐屯軍を相戦わせる歴史的大作戦に導いた」というものです。

本書は、葛西氏が、日本側、中共側、国府側の膨大な生の文書を駆使して、この資料の真価を裏付けた貴重な記録です。

時流に便乗した軽薄そのものの歴史学者や、身の程知らぬ提燈持ちのマスコミ人種の書いた戦争論が、如何に真実の歴史を曲解し、善良な日本国民を愚弄してきたのかを余すところなく証明しています。

葛西氏のこの労作に啓蒙される人の多からんことを切に祈念するものです。

序に代えて

① 私が蘆溝橋事件の仕掛人は中国共産党(北方局第一書記胡服こと劉少奇)であると初めて知ったのは、一九四九年(昭24)十月一日の北京政権誕生直後、河南省洛陽市西宮に駐屯する中国人民解放军第四野戦軍後勤軍械部(兵器彈薬部)第三保管処に現役将校(正連級、日本の大尉に相当)として勤務している時であった。

その頃、閉された中国大陆は『人民中国』の誕生にわきかえっていた。中国人民解放軍総政治部発行のポケット版『戦士政治課本』(兵士教育用の初級革命教科書で、内容はいずれも中国共産党の偉大さを教えるものばかり)は、

「七・七事変(葛西注||中国では蘆溝橋事件を一般にそう呼ぶ)は劉少奇同志の指揮する抗日救国学生の一隊が決死的行動を以って党中央の指令を実行したもので、これによってわが党を滅亡させようと第六次反共戦を準備していた蒋介石南京反動政府は、世界有数の精強を誇る日本陸軍と戦わざるを得なくなった。その結果、滅亡したのは中国共産党ではなく蒋介石南京反動政府と日本帝国主義であった」と

と堂々と述べ、また次の記述もあった。

「同志諸君、このように中国共産党はいかに滅亡の瀬戸際に立たされても、断じて滅亡することはない。マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン主義、毛沢東